

Crthur Quiller-Couch

〔“Q”〕

その人物と作品

part II 短編小説 安 藤 義 郎

「この本にふくまれている小品が作られた頃、私は、自分は成長し、たとえ身分は低くても正当な名誉をえつつあるのだ、とほんとうに信じていた。これらの作品は、郊外を散歩している時に、Cornwall と Fleet Street (ロンドンの出版社中心地) との間を列車で行き来する間に、或いは Cornwall に帰る途中、夜、Great Western 鉄道が不通になって思いがけなく出来た余暇に星空の下を歩きながら作られたものである……。」

これは彼を短編小説家として有名ならしめた、“Noughts and Crosses” という本の叙文の一部であるが、確にこの頃、即ち彼のロンドン時代は希望にあふれ、又旺盛に文筆活動をし始めた頃であった。この“Noughts and Crosses”は Part I で述べたように、彼が副主筆として活躍した Cassell 社発行の週刊紙、“The Speaker”に載せられたものをまとめたものであったが、彼の若さと詩情の漲るこれらの作品は、読む人々にみずみずしい感銘を与え、“Q”の名を一躍世に認めさせる所となった。

(ちなみに、noughts and crosses というのは、子供の遊びの一種で nought(○印)と cross(×印)を丁度五目並べのように三つ連なるように並べ合う遊びの事であるが、Qが自分の最初の短編集にこの題名をえらんだのは、自分の作品は未だに児童に等しいもの、或いは雑多なものを集めたもの、という考えからつけたのではないかと思われる。しかし、これを発表した頃は、既に長編小説、“Dead man’s Rock”, “The Astonishing History of Troy Town.” 及び “The Splendid Spur”を書いているのであるから、十分筆の力はあったのであるが、例によって彼の自作に対する謙虚さがそうさせたものであろう。)

Qの短編小説は、この“Noughts and Crosses”を最初として、多数作られていたのであるが、大別して二つの傾向にわけられる。一つは、作者の身の廻りに起った、ささやかな事柄を、淡々としてつづるもの、もう一つは、いわゆる story-telling な、面白い筋を追って行くものである。どちらに彼の本領があったか、区別するのはむずかしい。どちらにも詩があり美しさがある。ただQとしては、story-telling の作品の方が確かに書き易かったに違いない。処女作、“Dead man’s Rock”は、Steve-

nson 流の小説で大当たりをとっているし、(但し、この作品は、Q自身は気に入らなかったが) それ以後の長編小説にもこの傾向が多く見られる。事実、こういう物語を読むと、如何にも筆が滑らかに走り、むしろ滑らかすぎて、筋からはみでしてしまうような感じさえ受ける。これは彼の「話し好き」という性質にも由来しているのであろうが、とにかく、その筋の進め方、トリック、最後のどんでん返し、実に見事に計算され、構成され、story-teller としての面目を十分に発揮しているのである。

その例として、ここに、よく引きしまった好短編の一つ、「盗人ガブリエル・フットの話」という作品の概略を述べてみよう。

——俺は裁判の結果、不思議にも無罪になった。俺についた弁護士のおかげであったが、どういうわけか、彼は握手もしてくれず、話しかけようともしてくれなかった。そしてその眼ざしの中に、冷やかな、思わず俺の心をぞっとさせるような何かがあった。それを見た瞬間から、俺は彼に対して吐気をもよおす程の嫌悪感を抱いた。

俺は釈放されると、身中を温めるために、裏通りにある酒場へ立ち寄ったが、宝石商殺しの被告であった俺を認めると、人々は癲患者のように俺をあつかい、あげくの果は、酒場の主人に追い払われる始末であった。

外は寒かった。その込みこむような寒さが更に彼一弁護士—に対する嫌悪の念を強くした。無罪にしてこの寒い夜におっぼり出しやがって——俺はそう思いながら隣の町へ行くために荒野をどんどん歩いて行った。

と、ヒースの野が始まろうとする所に、一軒の家がある事に気がついた。近ずいてみると、二階の窓にはあかりがとまり、フルートの陰うつな音が聞えていた。

俺はこの家に頼んで食事でありつき、一夜の宿を借りようと決心した。しかし幾度ノックしても家人は出てこない。俺は業を煮やしてぐり戸を押しあげ、台所に踏みこんで行った。二階からは依然としてフルートの音が聞えている。どうもこの家の住人はフルート奏者一人だけらしい。俺はテーブルの上に散らかしてある夕食の残りをつめこむと、二階の住人にまず挨拶しておこうと階段を上って行った。その時、ふと、サイドテーブルの下に弁護士のかぶるかづらを見出したのである。俺は、はっと思った。手早くピストルに弾をこめると、階段をきしらせて上り、部屋の戸を開けた。——と、そこに彼が、俺の弁護士が坐っていたのだ。火は程よく燃え、テーブルの上にはグラスが置いてある。俺は如何にも気持よさそうにしている彼を見ると、寒い夜になげだされ、歩き続けなければならなかったのは、皆此奴の為ではないかという考えが再びむらむらと湧き上って、その場で彼を殺してしまおうかと思った程だった。

彼は俺とわかってても大して驚きもせず、酒をすすめ、煙草にも火をつけてくれた。

だゞ理解しがたかったのは、彼が、「今夜はどうもフルートとわたしの心がびったりと一致しない。フルートが承知してくれそうもない点をフルートに話しかけているのだ」などという言葉であった。俺はそういう風に超然としている彼を見ると、おそかれ、はやかれ、殺さずにはいられないと思った。

俺は第二の人生を始めるにあたってまず最初にお前を殺すつもりだと彼に告げる。彼は冷やかに笑って、「そうだろうと思った。だがその前に今度の事件について、このわたしがどの位知っていたか話してやろう」と言う。その時の口調は、自分自身をあざ笑っているようだった。

俺は同意した。この自分以外に、あの殺人事件をよく知っているという彼の言葉に興味をひかれたのだ。

彼は語り出した。

「検察側の説明はこうだった。——お金とダイヤモンドを持った一人の宝石商が、Roger Tallis という御者と共に夜の荒野を馬車で旅していた。明方、その二匹の馬がおびえ切って戻って来た。すぐに監視隊が行って見ると、Four Holed Cross の近くに馬車が倒れ、宝石商はピストルの弾を二発うけて死んでいる。お金とダイヤモンドは見つからず、Roger Tallis の姿も見えない。二、三日後、Roger Tallis と友人であるお前が、疑わしい金を持って、しかも上衣に血がついているという噂を立てられる。それに当夜、荒野を歩いているという事、又、お前のピストルが弾薬で汚れているという事が判明する。さてこれに対するわたしの弁護はどうだったか——①、ダイヤモンドをお前が持っていない事。②そのダイヤモンドは何処にも見つからず、お前がかくしたとは考えられない事。③ Roger Tallis がどうしても見つからない事は、明らかに Roger Tallis が、ダイヤモンドを持って他国へ逃亡している事。④決定的なのは宝石商の身体に打ち込まれた弾は、お前のピストルには合わない事。⑤お前が所持していたお金は、確かに宝石商の持っていたお金かどうか、判明し難い事。以上の点から宝石商殺しの犯人は Roger Tallis であると結論。——お前は疑わしい人物ではあるが、この事件については無罪……。

さて、事実はどうだろうか。ちょっとあの隅を見てくれんか？ ははは そうだ、つるはしとシャベルだ。お前の方が事実をよく知っているだろうが——Roger Tallis が宝石商を殺し、お前はその Roger Tallis を殺して、それから——ふふん、つるはしとシャベル、という事だ」

俺は確かに Roger Tallis を殺し、少し離れた所に埋めたのだった。この弁護士は事実を知っている。その上で俺を無罪にした。そのわけはわからなかったが、俺は心

臓をぐさりと突きさされたような気持だった。

彼は話をつづけた。

「もし、わたしが今夜三十分以内にお前を一万ポンドの財産家にしてやるとしたらどうかね。わたしの言葉が嘘だったらお前の言う通り、わたしを殺してもいい。だが本当だったら、命を助けて貰おうか」

俺は、この不可思議な言葉を始めは聞き入れなかったが、彼の逃げかくれもしないという、自信に満ちた言葉に半信半疑ながら、その契約を受けた。

彼はフルートをポケットにしまうと、俺にシャベルとつるはしを持って、ついてくるように言った。

俺は彼と一緒にヒースの荒野を歩いて行った。月は雲間に見えかくれしながら二人の姿を照らしている。彼は事件のあった Four Holed Cross までくると、地面を指して言った。

「ここが宝石商の倒れた所だ。少しはなれた所にもう一つの血だまりがあったが、検査側はてっきり宝石商のものだと思っていたのだ」

こう言いながら彼は更に進んで行った。そして、とある石灰焼のかまの入口に立ち止って地面をしらべていたが、「さあ、掘りかえすのだ」と俺に言った。その下には、俺が殺した Roger Tallis の死体がある筈だ。わかり切った事だったが、彼はとにかく掘ってみろと俺をせきたてる——俺は Roger Tallis を殺し、ここに埋めたのだ。あの時、Roger Tallis の身体からは、ダイヤモンドは見出せなかった。何と自分の運命をのろった事だろう——。

俺は石灰のまじった土を掘りかえして行った。そして今までかくれていた月がさっと光かなげかけたかと思った瞬間、俺は、穴の底から月の光が反射しているのに気づいた。

それは Roger Tallis の白骨の間に散乱している、あの、どうしても見出せなかったダイヤモンドだった。

思わず、あっと声を上げた時、弁護士の影が近ずいて来た。

「お前は、Roger が宝石をのみこんだのに気がつかなかったのだ。どうだ、契約には満足か。もうこの世でお前と顔を合わせる事もないと思うが、ただ一つお前に話しておきたい事がある。お前は、このわたしを犯罪から守ってくれたのだ。お前はわたしの家にシャベルとつるはしが用意してあったのを見たろう。確かに、わたしもこの宝石がほしかった。お前が部屋に入って来た時、わたしは、その事でフルートと言いつ争いをしていたのだ。二時間前までは、ほんとうにわたしは罪を犯そうとしていた。

だが、お前とこのフルートのおかげで、まだ弁護士がつとまりそうだ——」

こういうと、彼はくると後をむいて荒野を横切って行ってしまった。遠くからフルートの音がしばらくの間聞えていたが、俺にはその調子が先程とは違って活発に、快よくひびいているように思われた——。

以上は梗概であって、原作のうまさは到底表わし得ないが、実にうまく仕組んである短編である。特に最後の、穴を掘りかえす所や白骨の間に散乱している宝石が月の光を反射している所など、鮮やかに読者の眼に映る。また、弁護士が罪を犯すか否かという心理をフルートという道具を使って表わしているが、このフルートの果す役割は大きい。ある時は淋しさを添え、ある時は凄絶さを加え、またある時に詩情をたたえている。そして月の光を照らされて、フルートを吹きながら去って行く弁護士の姿は誠に印象的である。

Qのこの種の短編小説には、こう言った、奇怪なものを取り扱ったものが非常に多い。ghost story を集めた短編集もある。勿論、story-telling な物語には、こういう内容の方が書きやすい事もあるが、それにしても、“The Roll-Call of the Reef”

〔砂洲の点呼〕という、海兵隊の少年鼓手と、騎兵隊のラッパ手との不思議な靈魂の交わりの物語とか、或いは、流砂の中に姿を消して行く騎馬の老人の話〔The Affair of Bhiakirk-on-Sands〕等々、読む者を飽きさせる事がない。題材が非常に豊富で、一つとして類似した内容を持っているものがないのである。

彼は短編集“The Laird’s Luck and other Fireside Tales”の序文の中でこんな事を書いている。

「私はグラント・アレンが、『お前は短編に多数の考えとか筋とかを惜しげもなく使っているが、これらが無駄にせず、一つ一つもっと広い範囲にとりあつたならば、一生涯金もうけ出来るのに』と言った事を覚えている。しかし当時（短編小説を盛んに書いていたロンドン時代）は、物語をどのように書くか、という事が、主な目的であるように思えた。そして筋とか考えとか、着想とかは、あり余る程頭の中につめこまれ、或いは帳面に書き入れてあったのだ……。」

また、「小説家としてよりも叙情詩人として生れついた」と自ら言っているが、その言葉通り、作品に文学の生命たる詩が漲っているのも、どうかすると、かさかさになりやすいstory-tellingな短編に、しっとりとした香りを添えているのである。

さてこれと全く対蹠的なのが身辺小説である。story-telling な物語を読んで直後にこの身辺小説を読むと、あたかも役者の早がわりのような感じを受ける。それ程鮮や

かに筆致を異にしている。ここにはこれという話の山もなければ、ぐんぐんと読者を引っぱって行く筋の発展もない。しかしその暖かな、或いはほほえましい雰囲気は、読者に何かしら爽やかなものを与えるのである。先程、Qはstory-telling な物語の方が書き易かったのであろうと書いたが、この身辺小説では、Qの人物がまざまざと出ていて、Part I で述べたような、彼の誠実で快活な、豊かな人間性を見る事が出来る。例えば、“A Cottage in Troy” (Troy とは彼が永住した Foway の事であるから “A Cottage in Troy.” というと、彼の家 “The Haven” を指す) の中の、“The Happy Voyage” とか、長男 Bevil の出生にヒントを得て作られた、“Old Aeson” などは誠に秀れた身辺小説である。“The Happy Voyage” というのは、「私」の召使で、Annie という、オムレツを作る以外にあまり取得のない女が、町の時計屋の Tubal Cain (普通 Tubal-cain と書くと、聖書に出てくる真鍮・鉄器具類の製作者の事になる) と結婚して、何処へも知れず新婚旅行に出かけてしまう。それから一週間ばかり経った、初夏のある日、夕食後、「私」がテラスに出て、夕暮の海をぼんやり見つめていると、眼下の入江に浮んでいる病院船(この船は The gleaner という老朽船で海上管理局に買われ、万一、コレラ患者が出た場合は、ここに隔離する事になっているのだが、まだ一度も使われた事がない) から、「アニー・ロリー」を奏でているヴァイオリンの音が聞えてくる。デッキの上には、確かに、あの二人らしい人影があった。「私」は声をかけて見た。すると向うから、「こちらへおいで下さいませんか」という返事が聞える。そして、今夜が蜜月旅行の最後の晩であり、二人とも、「私」の訪れるのを望んでいるから、と熱心にさそつてくれた。二人は蜜月をこの船上で過していたのである。「私」が船上にたどりつくと、Annie はバケツをさかさまにしてその上に腰かけ、「私」と新郎 Cain とは彼女と向き合って甲板の上に腰を下ろした。薄青いドレスを着た彼女は、まるで貴婦人のようであった。それに廻りから反射してくる青い光に包まれて幻想的な趣きさえ加えている。Cain はひざの上にヴァイオリンを置くと、こんな事を言った。「わたしは、プリマス同胞教会に属して、熱心な信者であるけれども、人というものは、一度は、そういうものから抜け出して——特に新婚旅行の時などは——完全に自由な喜びの世界の中にひたるのもいいでしょう。そんな理由でわたし共はここを選んだのです。」「私」は、はじめ、どうもこれはとんだ茶番劇だと思ったが、二人の真面目にそう思っている様子に笑う事は出来なかった。更に Cain はヴァイオリンを取り上げると、Annie と踊ってくれるように頼む。「私」は同意してデッキの上を彼女と踊ったが、この奇妙な出来事は、おかしくもあり、心を打たれるものであった。朝が来て、「私」は彼等とわかれ、家に

戻ったが、やがて二人をのせたボートが、朝の光の中を町の方へ向って滑って行くのが見えた——。

大体こんな筋である。話の内容は、別にどういう事もないのだが、いかにも素朴で美しい。詩があるというより、詩そのものになっている感じである。Fowey の海は、作者が深い愛情を持っていただけに、その描写には、すみずみまで神経の行きとどいた巧みさが見られる。この作品ばかりでなく、Cornwall に取材した一連の短編に見るべきものがあると云われるのも、結局は、心から海辺を好んでいたという彼の心情によるものと思われる。Qの、作家としての体臭がそこにある、と云ってもいいだろう。

Qの短編は、こういう二つの違った型—— story- telling なものと身辺の事を取りあつかったもの——で作られているが、全部の短編を読み終えてみると、そこに、ある共通の思想（むしろ信念と云ってよいかも知れないが）を見出すことが出来る。それは人生に対する誠実さである（ここでいう「誠実さ」は人生をうわべだけで取り扱っていないという意味であるが）。例え主人公が善人であろうと悪人であろうと、うす馬鹿であろうと、必ずそこに人生の哀歓といったものを感じさせるのである。不健康な要素は一つもふくまれていない。悪く言えば常識的と言えるし、第一次大戦後、強い刺激を求めていた読者層にもてはやされる、というものでは決してなかった。“Duchy Edition” としてそれまでの小説30冊をまとめて出版する時も、Qは、「自分の作品にはそういう時代の風潮に来るような要素はないが、いつか大衆の趣味がよい方向に戻る事を確信する」と言っているし、“The White Wolf and other Fireside Tales” の中では、次のような事をはっきりと書いている。

「Scott, Dickens, Jane Austen, Trollope の世界は、思いやりのある、静かな世界であり、それは生きる為の権利である。また、彼等の作品は、それ以前の Goldsmith や、Fielding のように、この短い人生を愉快に、面白く、善い事をするものとして考えていたのである。さて現在はどうであろうか。さかしらぶった輩は、「慈悲」というとしかめ面をし、あざ笑う。性、自殺いざこざ、幻滅、など取り引きしている小説家は、この世で最も安易な遊技をしているのである。無学のものだって墮落しようとする気持があったら、そういうテーマを取り扱って、大当りをとる事も出来よう。しかし、善良で勇敢で忍耐強く、冒険に立ち向って行くような、人物の登場する広い舞台を人々に見せることは——それこそ芸術家の試練であるように思われる。それは、芸術家が成長して行き、生きる価値のあるこの世界を去る前に、自分等人間の仲間を

Erthur Quiller-Couch ["Q"] その人物と作品

いつくしみ深く判断し、彼等の手助けするのを知る事なのである。」

以上は、いかにも彼の人柄を物語っている言葉であるが、いわゆる手先だけで人の心にショックを与え、ただ時代の波に迎合しさえすればよいといった作品は、とても彼には書けなかったし、書きたくもなかったのである。むしろ断固として、こういう安直な創作態度を排除したのである。Qの教え子であり、現代一流の劇作家である、J. B. Priestley の言うように、「あらゆるQの作品は、熟した人類愛で満ち満ちている。全作品は、単に紙の上を書き飛ばして成ったものではなく、真に書かれた」ものであった。

なお次回 Part に於ては、長編小説、及び詩を取りあげ、全般的に見た作品の傾向、更に、まとめて、彼の人生観、創作態度といったものにふれてみたいと思っている。

(本 学 講 師)